

ヨハネによる福音書 3章 10～21 節

順を追って読み進めてきた「ヨハネによる福音書」は今月、あの3章16節を記す箇所となりました。言ってみれば、聖書の中で一番有名な箇所と言えるでしょうか。折しも、今年のイースターは今月の第2週、4月12日(日)です。そのような記念の時にヨハネ3章16節を味わい読むことができ、うれしく思います。今月ははたして、そこからどんな語りかけが聞こえてくるでしょうか。

なお、現在の新共同訳聖書では「3章10～21節」がイエスの言葉の固まりとされているため、この部分を一括りとして取り上げることにします。ちなみに、一つ前の口語訳聖書では、イエスの言葉そのものは「10～15節まで」とされています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(16)

・おそらくは聖書の中で最もよく知られた箇所で、従来から、「小福音」と呼ばれてきました。聖書が伝える良き音信おとづれを一言で要約したひとこともの、という意味です。

宗教改革者のルターは、「福音のミニチュア」という言い方をしました。

さらには「黄金の聖句の代表」という名も付けられ、「万人の聖句」といった呼び方もなされています。

・いずれにせよ、そのように呼ばれてきた、また呼ばれているその内にははたして、どんな思いが込められているのか。そのような呼び方に いったい、どんな意味が見て取れるのでしょうか。

・ちなみに、この聖句を知ったのはいつ、どのような時だったのでしょうか。そこにどんな思い出があるのでしょうか。そして、現在の印象や思いは？

・内容的には、第一に「神は、その独り子をお与えになった」と告げられていますが、それは何をどうするためだったのでしょうか？

・そもそも、「滅びる」とはどういうことなのか。聖書で言う「滅びる」(アポレ-タイ アポルリウ-ミ $\alpha\pi\acute{o}\lambda\eta\tau\alpha\iota < \alpha\pi\acute{o}\lambda\lambda\upsilon\mu\iota$)とは、本来いるべき場所からいなくなって失われた存在になる、ということです。

・だとしたら、「本来いるべき場所」とは、どのような所がそれなのか。そして、そこから「いなくなる」とは、また「失われる」とはいったい、どういうことなのでしょう？

・要するに、神との関係において、それは私たちのどういう状態を意味しているのか。「滅びる」という表現の底辺に流れる意味合いとは はたして、どういうものなのか。それがまずもって、メッセージを読み解くかぎになるのではないのでしょうか。

・そのうえで、「一人も滅びないで・・・」と言われているその裏に、私たちは神の「何」を感じ取るか。それが次のかぎになるように思われます。

・「お与えになった」(エド-ケン ディド-ミ $\epsilon\delta\omega\kappa\epsilon\nu < \delta\acute{\iota}\delta\omega\mu\iota$)とは、贈り物として与える、無償で与える、ということ

です。とはいえ、何の痛みも伴わない自分に都合の良い物を贈って、それではたして、本当の贈り物と言えるでしょうか。

・であれば、神が私たちにその独り子を（本当の贈り物として）お与えになったと言うとき、それは、神が何をどのようにしてそうされた、ということなのでしょう。

いかにも重要なメッセージが語られているように思われます。

・ヨハネは一連の言葉を通し、はたして何を言わんとしているのでしょうか。ヨハネが伝えたい主題の中心はいったい、何なのでしょう？

「神が^{みこ}御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、
御子によって世が救われるためである」(17)

・そもそも、新約聖書が書かれた原語のギリシア語では、「裁く（^{クリーネー}κρίνει^(イ) < ^{クリノー}κρίνω）」という言葉には「区別する」とか「^{えり}選り^わ分ける」とかいう意味合いがあります。

・だとしたら、「神は世を裁くためではなく」というのはどういう含意になるのでしょうか。つまり、事を神の側からの視点で考えるとき、それが裁くためではないとしたら、ではどういうことになるのか、ということです。

・そこには神の側の愛と真実とがあり、それに向き合う私たちの姿勢がそこで問われているように思われます。

「信じない者は既に裁かれている」(18)

「それが、もう裁きになっている」(19)

・とはいうものの、それでもやはり、ある人々は言われるかもしれません。「そう言ったって、聖書にはやっぱり、裁きのことが書いてあるんじゃないですか？」

・しかし、ヨハネの言葉を注意深く見てみると、どうでしょうか。

①「(信じない者は) 既に裁かれている」(18)

②「(それが、) もう裁きになっている」(19)

・裁きについての言葉がそれぞれ、現在完了形（受動相）と現在形（能動相）で記されています。つまり、「既に裁かれている（^{ヘーデ}ἤδη ^{ケクリタイ}κέκριται）」と言って、それがすでに起こって今もそうであること（現在完了）を語る一方、「もう裁きになっている（^{エスティン}ἐστίν ^{ヘー}ἡ ^{クリシス}κρίσις）」と言って、それが今現在のことであること（現在）をいま一度、述べているのです。

・ということは、「裁き」ということについて、そこからヨハネのどんな見方を感じ取ることができるか。裁きという事柄のいかにも深い意味合いがそこに暗示されているように思われて、興味深いところではないでしょうか。

参照：「^{ほうとうむすこ}放蕩息子の^{たと}譬え」(ルカ 15：11～32)

・ここで、「滅びる」とか「失われる」とか、そしてそこから「救われる」とかいった主題にどこよ

りも深く触れている物語を思い起こされないでしょうか。イエスの語られたあの有名な譬え話、「放蕩息子の譬え」です。聖書の福音の核心を物語る譬え話の代表と言っても過言でないでしょう。

・「小福音」と言われる今月の箇所とあわせ読むことで、福音や信仰の大切な中心が見えてくるように思われます。ストーリー自体はごくシンプルなものですから、いま一度読み直し、思いを巡らせてみたいと思います。

・そこで語られているメッセージは幾つかの点で、イエス・キリストの福音の核心を示すものとなっています。それは何よりも、弟息子に対する父の態度に見て取れます。

① 1 つは、父親が息子を追いかけて、無理やり連れ戻しにはいかない、ということです。それはいったい、なぜなのでしょう？

② 2 つ目は、父親はひたすら待ち続ける、ということです。ただただ、息子の帰りを待ち続けます。父親ははたして、どんな思いでそうし続けたのでしょうか。そして

③ 3 つ目は、自分の過ちを謝罪する息子に、父親は一言も叱責の言葉を語っていない、ということです。何が父親にそのような態度を取らせたのでしょうか？

・この放蕩息子の喩えを本日の箇所とあわせ読むとき、そこにどんな重なりが見えてくるのでしょうか。そして、そこからどんなメッセージを聴き取ることができるのでしょうか。

参考：ヨハネ 1：5

・今月の聖書は 神の私たちへの関わり方を告げて、「小福音」と称されるにふさわしい箇所となっています。

・そのメッセージを念頭に置きつつ、終わりにヨハネ福音書の冒頭の一節を振り返ると、どうでしょうか。そこからまた一つ、恵みの語りかけが聞こえてきはしないでしょうか。

・その一節とは、ヨハネの 1 章 5 節です。そして、新共同訳と口語訳の訳文の対照に、そのヒントがうかがわれます。

新共同訳：「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかつた」

口語訳：「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかつた」

・「暗闇」「やみ」とはこの世（の私たち）のことであり、「光」とは言の、すなわちイエス・キリストの内なる命を意味しています。

・つまりは、元々のギリシア語（κατέλαβεν<καταλαμβάνω）とヨハネ福音書の特質からして、ヨハネは新共同訳・口語訳両方の意味を込めて、この一節を記したと考えられるのです。

・とすれば、そこからどのようなメッセージを聴き取ることができるのでしょうか。イエス・キリストというお方に対する

- ①弟子たちの有り様との関連で
- ②ユダヤの民の有り様との関連で
- ③教会の歴史との関連で、そして
- ④私たち自身の有り様との関連で

.....

「聖書というのは、読んで説明を聞けば、それはそれで、それなりに分かるように思う。

けれども、自分自身への語りかけとなると、

『だから何なの？ どうなの？』と、読み取ることがいまいち簡単ではない」

・しばしば耳にする言葉です。

・自身の生き方へのメッセージを読み取り、聴き取ること

— 容易とは言えないとしても、それこそがやはり、

聖書を本当に読むということではないでしょうか。

・皆さんは今月の箇所から、どんなメッセージを聴き取られたでしょうか。

・「ヨハネ 3:16」はどれくらい現実感をもって迫ってきたでしょうか。

どれくらいリアルに受け止められたでしょうか。

自分にとって、その中心的メッセージとは？

*ちなみに、皆さんの「黄金の聖句」「^{あいしょう}愛誦聖句」はどこ何でしょうか？